2024年度 教職課程通信 Vol.2

発行：令和６年８月19日
編集：秋田公立美術大学
美術教育センター
教職支援室

教職課程で学ぶ皆さんへ

～誌上インタビュー　尾澤　勇先生　大関智子先生～

司会者：お二方とも、秋美においでになる以前に中高での教職経験をお持ちです。そもそも美術科教員を目指した理由を教えていただけますか？

大関先生：当初は教員を目指す気持ちはなく、大学院修了後、都内のアパレル企業に就職しました。勤めていた頃は作品を制作することはほとんどなかったのですが、興味のある展覧会には足を運んでいました。それを繰り返しているうちに、いつしか絵を描いていた頃の充実感が蘇り、制作に手を動かす仕事を求めるようになりました。また、いくつかの展覧会の中で子どもたちの作品に心を動かされ、未来を担う子どもたちの人生を豊かにするお手伝いができればと教職を志したと記憶しています。

尾澤先生：作品制作との両立を考えて教員採用試験を受けました。そもそもの動機は、工芸作家として活動していくための食い扶持を得ることができたらというような軽い感じでした。

たとえ一人でも美術・工芸が好きな生徒に出会えたら、教員としてやっていけるかもというような感じでしたが、今思うと浅はかでしたね（笑）。

司会者：次に、秋美での教育と研究を進める上で、それまでの美術科教員としての勤務経験がどのように生かされているとお感じになりますか？

尾澤先生：教育研究と自分の作品制作は、私の両輪であり表裏一体のものであると考えています。今まで中学校と高等学校で教えてきたことが、美術・工芸の教員養成や自身の制作キャリアの基礎です。中高生のことを考えたり、教えたりする経験がないと、教職での教員養成の指導は成り立ちません。教職の授業を行う時には、常に中高生に対する指導を念頭に置いています。中高の教員だった時の自分の失敗も踏まえて、今の、そしてこれからの教育を考えています。

大関先生：私は絵画技法を中心とした演習科目を担当しているのですが、美術科教員をしていた時に必要だったと感じたこと、さらには教職以外でも「生かせる」と考えたことをもとに授業内容を構成しています。また、これまでの指導経験から、学生の皆さんが教える立場になることを意識しながら、説明する内容や言葉を選んで伝えるよう心がけています。実際、授業で扱った内容が、教育実習での指導や研究授業、あるいは自身の制作で生かせたという声を聞くと、これまでの美術科教員としての経験が生かされていると感じます。

司会者：今の質問と重なるかも知れませんが、教職課程の授業を行う上で、ご自身が特に大切にされていることや意識されていることを教えてください。

大関先生：常にマラソンランナー（学生）と伴走者（教員）のような関係を心がけています。学生の皆さんがつくりたいとイメージしたものをかたちにするために、対話を繰り返しながら可能な限り共有し、時には見守りながら、素材や技法の選択について一緒に考えていきます。制作途中で試行錯誤を繰り返しながらも完走することができた暁には、（学生さんには気付かれないように）ひっそりと感動しています。

尾澤先生：学生に対して、なるべく本物や実在と出会える場をつくり、五感を通して実感することによって考えたり、実行できたりする力を身に付けてほしいと考えていて、それを学生自身の制作や授業作りにも生かしてもらいたいと思っています。少し大げさかも知れませんが、教育を担う同志として学生と共に成長していきたいと願っています。

司会者：普段から学生の皆さんに伝えておられることと思いますが、最後に、教職課程履修者への期待を込めて、改めて激励のメッセージをお願いします。

尾澤先生：自分の周りのヒト・モノ・コトの全てが先生です。様々なモノから貪欲に吸収してほしいです。教職課程は、主観と客観を行き来しながら様々な境遇や立場の人の気持ちに気づくことができる場です。成長することで自分の眼を鍛えてください。「気づける眼」が大切です。様々な人に寄り添える人になってほしいと思っています。

大関先生：教員免許の取得まで、多忙な日々を過ごし、険しい山を乗り越えなければなりませんが、登り切った頂上からの景色はまた格別だと思います。いつでも応援しています！

司会者：尾澤先生、大関先生、本日はありがとうございました。

教育実習（前半）を振り返って

５月下旬から７月上旬にかけて、本年度前半の教育実習が行われました。授業を参観した立場から、授業実践の成果を紹介します。

ビジュアルアーツ専攻
３年　對　馬　輝愛瞳 さん
〔青森県立青森中央高校〕

「相手の悩みを解決する商品」を構想し、アイビスペイントを活用して商品を制作する授業でした。自分自身の悩みを考えてから、クラスメイトに具体的に悩みを説明したことが、商品を構想する有効な手がかりとなりました。

美術を選択している生徒たちであるせいか、アイビスペイントの扱いに順応し、スムーズに指を動かしながらアイデア商品を制作していました。

鑑賞の時間では、生徒が悩みを解決する商品を紹介するたびごとに、あちこちで、「その商品ほしい」「ほしい」という声が挙がるなど、ねらいに迫る授業であったことを意味していました。

研究授業には、高校時代から本人を知る美術科の３名の先生方のほか、教頭先生、学級担任が参観に訪れ、実習生の活躍を温かく見守っていました。

授業終了後に、自分自身が構想したアイデア商品が生徒の制作意欲を高めるきっかけをつくり、アイビスペイントを効果的に活用していたのではないかと自己評価していましたが、全くその通りに思いました。　〔担当：谷村〕

ものづくりデザイン専攻
３年　杉　本　瑞　月 さん
〔長野県安曇野市立堀金中学校〕

音楽から触発されたイメージを、モダンテクニックを活用して表現し、互いに鑑賞し合う授業でした。

１時間の中で、制作の楽しさと鑑賞し会うことの意義を実感させたいと願い、生徒たちの学習経験等を踏まえて課題提示の仕方やワークシートの内容を工夫するとともに、全体の時間配分を何度も練り直していた姿が印象的でした。

前時までの学習を生かし、モダンテクニック以外の技法を自分なりに工夫している生徒もおり、いわゆる“型”にとらわれない自由な発想での表現ができていました。

同じ曲を選んだ生徒同士による鑑賞の場面では、曲想のとらえ方や印象の違いに新鮮な驚きを感じながら、教室のあちらこちらで自主的な話し合いが生まれました。

指導担当の先生からは、自作の参考作品をはじめ、ＩＣＴの効果的な活用による視覚的効果の高い資料提示や、制作した（する）作品と一体となったワークシートの工夫（15㎝四方の用紙で作品を制作し、Ａ４判のワークシートに貼付）など、入念な教材研究と授業づくりに向けた努力を高く評価していただきました。

また、個々の進捗状況に応じた的確なアドバイスや終始堂々とした態度で指導に当たる姿にお褒めの言葉をいただきました。　〔担当：加賀谷〕

ものづくりデザイン専攻
３年　松　本　美　麗 さん
〔長野県立上田染谷丘高校〕

他者へ贈るレターセットのデザインを考え制作する活動で、１時間目はレターセットの作成、２時間目（本時）は作品の相互鑑賞という２時間の題材でした。形や色彩・材料による効果を理解するだけでなく、誰かのために想いを巡らせものを作ることを通して、思いや温かさを感じ取ることをねらいとしています。

本時は、前時に制作したレターセットの手直しを行なった後、ミニミニ発表会と題して、作品について一人ずつ発表し、続いて机に置いた作品を全員で見てまわりました。ユニークな作品がたくさんあり、生徒の発想の豊かさや柔軟さに改めて驚かされました。

授業の全体像が明確に示され、細かく作業を区切り、時間を明示し、発表内容についてもポイントを示して生徒が迷わないようにするなど、様々な工夫が見られました。発表する生徒のすぐ側に立ち、一人一人の発

表に対してコメントするなど、細やかな配慮が見られました。

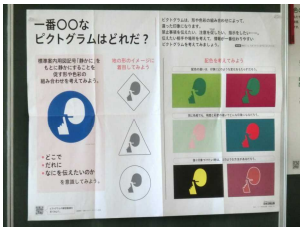
沢山の先生方に授業を参観していただき、授業後の反省会には、芸術科の先生方が全員出席され、熱心に協議していただきました。先生方からは、工夫しながら積極的に授業づくりに取り組んだ成果が現れたというお言葉をいただきました。

優しさと思いやりを形にするという主題と授業者の個性がかみ合い、生徒同士がお互いに気遣い、助け合うゆったりとした雰囲気の中で展開した授業でした。

〔担当：渡部〕

コミュニケーション・デザイン専攻
３年　東　　結　花 さん
〔茨城県東海村立東海南中学校〕

「色彩とデザイン」を主題とする２時間扱いの授業の１時間目。ピクトグラムの意味やそこに込められた願いを的確に表現するための色彩効果について考えさせる授業でした。



例示したピクトグラムについて、「人物」と「背景」の配色をどのように組み合わせれば最も効果的かという学習課題を提示し、グループごとに考えさせ、決定した配色とその理由を発表させました。このとき大型モニターに、グループごとの発表に応じたピクトグラムが映し出され、配色の効果が教室全体で実感できるよう工夫がなされていました。この視覚情報の共有により、それまで多少ざわついていた教室の雰囲気は大きく変わったように感じました。

次の時間では、本時における学習の成果を生かし、色彩の効果を踏まえながら、一人一人がオリジナルのピクトグラムをデザインすることが予告され、生徒の歓声があがっていました。

学生本人から、「色彩は好きな題材であり、教材研究を深め、指導案を作成し、授業の準備をすることがとても楽しかった。」という話がありました。「まず自分自身が題材を楽しむことが大切」実習生のそうした気持ちが生徒に伝わった授業であったと感じました。

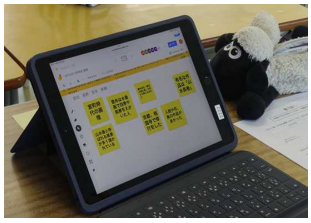
〔担当：嶋崎〕

景観デザイン専攻
３年　山　下　暁　羽 さん
〔山口県周南市立熊毛中学校〕

参観したのは、本人が事前に学習指導案を用意していた題材ではなく、学校の年間指導計画に沿った「水墨画」の鑑賞の授業でした。ねらいは「生徒たちの水墨画の見方や感じ方を深めさせること」にありましたが、郷土にゆかりのある偉人を取り上げることで郷土愛も育みたいという願いも込められていました。

授業の流れとしては、日本の水墨画様式を大成させた雪舟と、その代表作とも言える「秋冬山水図（冬景と秋景）」について、生徒一人一人にインターネットで調べさせ、調べたことや作品の鑑賞をとおして感じ取った水墨画の魅力等をGoogle Jamboardを使って全体で共有する活動が中心でした。

参観を終えて感じたことは、「楽しい、面白いと思ってもらえる授業づくり」をモットーに掲げている本人の思いが授業全体から伝わってきたということです。これは、授業のプロであるべき教師にとってはとても大事なことです。また、美術の授業ではほとんど触れてこなかったＩＣＴの活用に果敢に挑戦したことも、勇気と行動力があることの証明です。これからも、教職課程の学びをとおして、さらなる教師としての資質の向上に努めてほしいと願っています。



〔担当：齋藤〕

教育実習報告会（前期）のお知らせ

◇日　時「教育実習事前事後指導」の時間
　１回目　10月７日（月）２限（10:30～12:00）
　２回目　10月15日（火）２限（10:30～12:00）
　　※月曜授業

◇会　場　教育実習室

◇参加者
- 「教育実習事前事後指導」の履修者（必修）
- １、２年生の教職課程履修者

※自分自身の実習をイメージするために、履修している授業に支障のない限り、ぜひ参加をしてください。

８月下旬から11月上旬にかけて、15名の皆さんが教育実習（後半）に臨みます！

教育入門(１年次)を終えて

○　はじめに

教職入門では「教職の魅力ややりがいとは？」「美術教育の意義とは？」という二つのテーマに基づき、日新小学校及び美大附属高等学院での実習を中心に、現時点での自分なりの“解”を求めて学びを深めていきました。

授業の中で大事にしてきたことは、実習先での体験活動以上に、事前事後の協議や考察でした。自分自身の経験をもとに、テーマに対する仮説を立て、グループで話し合い、実習を通して検証し、振り返って考察するサイクルは、教職に対する見方や考え方の変化や深化を導くこととなりました。

また、話し合いを重ねる中で、机を並べるお互いのコミュニケーションの深まりにもつながったのではないでしょうか。

○　教職の魅力・やりがいとは？

日新小学校を訪問し、グループごとに５、６年生の各学級で授業参観と授業のサポートを行いました。「先生」と呼ばれる初めての体験にくすぐったいものを感じながらも、子どもたちとのふれあいを楽しみ、教職の魅力について考える機会となりました。

また、訪問前には黒沢淳校長先生から貴重なお話をいただき、発達の段階に応じた教育の大切さについて理解を深めることができました。

○　美術教育の意義とは？

本学の前身であり、特色ある美術・工芸教育に取り組んでいる秋田公立美術大学附属高等学院では、岸本武久副校長先生の刺激的なご講話を皮切りに、木材工芸、金属工芸、インテリアデザイン、ビジュアルデザインの各コースの授業参観と指導に当たられている先生方との懇談を行いました。

施設設備に恵まれ、少人数制による専門的な美術教育を目の当たりにして、美術教育の意義や大切さについて、自分なりの解を見いだすことができました。

「最終レポート」から

大学に入学するまで、美術に関わる仕事をしたいと思うことはあっても、教師になろうと考えたことは一度もなかった。美大に進学することが決まったとき、周りから「将来食べていけるの？」「大変だよ！」などと散々言われて辛くなったことを記憶している。

それでも、教職入門をはじめとする教職課程を履修している中で、美術教師としての道を歩みたいと考えるようになった。日新小学校での児童たちとのふれあいや美大附属高等学院での専門的な学びの様子を目の当たりにしたことが、その考えを後押ししてくれたような気がする。

一人一人の心を豊かにするとともに、自分の心を表現する方法を手に入れることができるのが、美術教育の魅力であり、意義であると私は考える。それを伝えられる美術教師を目指したい。

後期は「学校体験実習１」で秋田西中学校を訪問し、学校における組織的な指導体制や子どもの主体性を高める指導について考えます。

教員採用試験情報

◇　教採受験の準備は早めのスタートが肝心

文部科学省は、本年度６月16日を標準日としていた一次試験日を、来年度はさらに１ヶ月程度前倒して、５月16日とすることを各自治体に要請しました。

背景には、深刻化する教員のなり手不足を踏まえ、民間企業等の採用に対抗して人材を確保するねらいがあると言われています。

すでに、大学３年生時点での一部試験の前倒しをはじめ、教職教養（専門）試験の廃止（茨城県 2026採用から）といった大胆な取組を実施する自治体も出てきました。受験者の減少が切実な問題であることの表れではありますが、見方を変えれば、教員を目指すチャンスが広がりつつあるとも言えます。

採用試験は、教科（美術・美術教育）教養、教職教養に関する筆記試験のほか、小論文（論作文）や面接（個人及び集団）、模擬授業など、その内容は多岐に渡っており、各自治体によって出題傾向や試験方法は様々です。秋美生としての専門的な学修を考えると、採用試験を目指すためには、できる限り早めに準備を進めていく必要があります。

教職支援室では、せっかく苦労して取得した教員免許を生かせるよう、一人でも多く教員採用試験にチャレンジしてくれることを願い「教員採用試験対策セミナー」を開講しているほか、教採に関する相談を随時受け付けています。

教員採用試験対策セミナーは“月曜５限”、「教職および博物館学芸課程センター」（教職支援室隣）で実施しています！

後期は**10月15日（火）〔月曜授業〕**からです。